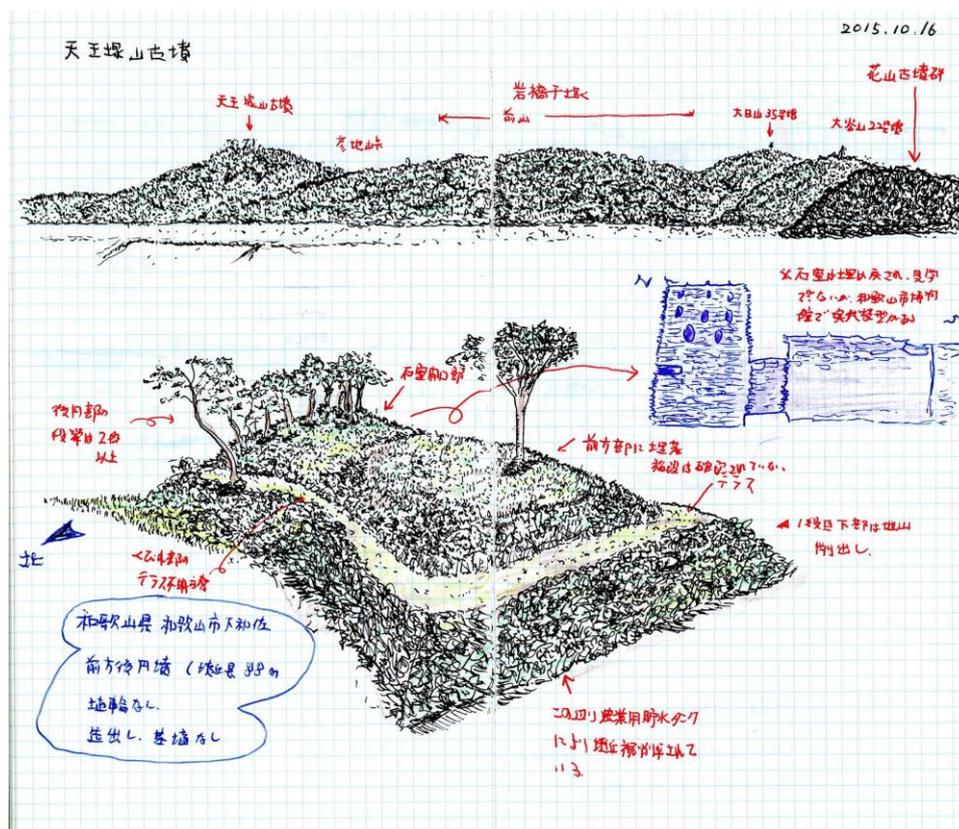


館長だより第20号 (2020/9)

令和2年度スポット展示「河内一浩氏野帳展—岩橋千塚を見つめる眼—」



時はすでに初秋、しかし気温は37度近く、体温に等しく、日本国内熱中症で亡くなる方が新型コロナウイルス感染の重症患者を上回るという状況が続いているという今日この頃ですが、皆様にはいかがお過ごしでしょうか？

さて、県立紀伊風土記の丘では、令和2年度スポット展として「河内一浩氏野帳展—岩橋千塚を見つめる眼—」を開催いたします。

野帳とは、考古学などの野外調査の現場で観察記録を残すために用いられる小型のノートです。本展では「野帳使いの名人」として注目されている、河内一浩氏の40年以上書き貯められてきた野帳の一部を公開展示するものです。とくに和歌山県在住の考古学研究者である河内氏の野帳には、岩橋千塚古墳群をはじめとする様々な記録がカラフルで詳細なスケッチなどが残されています。

野帳から河内氏の言葉を抜き書きすると次のような言葉があります。

「記録することを楽しむ」… [記録の対象は資料、遺跡だけではない。目的地までのルート、その日食べたもの、その時の感じたことすべてを記録した野帳はまるで自分史のようなものとされる。また何を記録するかに決まりはない、自由に書くことで自分だけの記録ともなる。]

「知識をもって見る」… [スケッチは単なる模写ではない、そこには見る者の視点が加わって

る。現代の建物に囲まれた生い茂った森も、知識とともに見つめる、考古学者の眼には古墳の姿が見えてくる。]

この項目は図示した天王塚古墳のスケッチを見るとよくわかります。遺物については、「**観察する**」… [モノを知るには徹底的な観察が重要であるとし、現地に立つこと、実物を見ることの重要性が示されている。]

さらに「**書くことで頭の中を整理する**」では [記録することはモノゴトをより深く考えるうえで重要である] とされています。

最後に「**記憶を記録する**」というのは、写真ではなくわざわざスケッチするのはなぜか?という問いに対して、「**メモをすることによって頭の中に刻んでいるこれは、記憶のための記録である。**」と結ばれています。

ところで河内一浩氏は和歌山県岩出市の在住で、1961年大阪府生まれ、(財)和歌山県文化財センター、羽曳野市教育委員会で多くの発掘調査に携わられました。古墳時代の埴輪研究が専門で、畿内及び紀伊の埴輪に関する論文を多く執筆されています。野帳の使用は1981年にはじまり、2020年8月現在で525冊目になります。近年、野帳愛好家(通称)の間で「野帳使いの達人」と呼ばれ注目されているようです。

ともあれ、河内氏の描く野帳の世界を紹介し、その詳細なスケッチや視点を通じて、岩橋千塚古墳群の魅力と遺跡や資料の観察記録の楽しさに触れていただきたいと思います。

ぜひともご高覧いただきますようご案内いたします。

記

展示名 ; 令和2年度スポット展示「河内一浩氏野帳展—岩橋千塚を見つめる眼—」

会 期 ; 令和2年9月1日(火)～9月22日(火・祝)

会 場 ; 資料館ロビー、無料展観